

乳幼児健診の評価に関する研究

一 歯科健診の評価と今後のあり方一

佐々竜二・井上美津子

乳児期から幼児期前半にかけては、乳歯の萌出開始から乳歯列咬合の完成までと口腔の形態的変化が著しく、同時に、咀嚼や言語などの口腔に関連した機能発達も顕著な時期である。そこで、乳幼児期の小児のう蝕をはじめとした歯科疾患を予防し、口腔の健康を維持していくことは、口腔の形態的発育や機能的発達の面からも重要である。またこの時期は、食生活をはじめとした小児の生活習慣が形成されていく時期でもあり、小児の保育環境や親の養育態度などにより小児の生活習慣の個人差も大きい時期である。特に、核家族化、少子化、生活の多様化に伴う小児の生活環境の変化は、食事や口腔習癖など口腔に関連した問題と結びつくことも多く、これらの問題がう蝕や不正咬合などの歯科的問題の原因となる場合も少なくない。また、価値観も多様化している現状では、従来行われてきた画一的な指導では、生活習慣の改善も難しい状況にあると考えられる。

そこで本研究では、まず各地域における乳幼児歯科健診の実態を把握し、さらに小児の年齢、発達時期に応じて、どのような診査内容や指導・相談の場などが必要と考えられているかを、歯科サイドと受診者サイドの双方を対象に調査することとした。

見出し語：歯科健診、う蝕、不正咬合、生活習慣、口腔習癖

現在、乳幼児期を対象とした歯科健診は、市町村が実施主体となっている「1歳6か月児歯科健診」と保健所で実施している「3歳児歯科健診」が代表的なものであるが、その他の地域によって、年齢を定めての歯科健診や保健所での診査・相談などが実施されている。しかし、1歳6か月児歯科健診はすでにほとんどの地域で実施されるようになってきた反面、その健診のシステムや内容は地域により様々であり、3歳児歯科健診を除くと、健診の実施状況の地域差は非常に大きいと考えられる。

また、健診時の指導や事後措置に関しても小

児とそれをとりまく環境の変化により、従来の画一的な指導、処置に対する批判もでてきており、小児の発達や環境にあわせたよりきめ細やかな内容が求められているようである。

本研究においては、まず各地域における乳幼児歯科健診の実態を把握するために、市町村および保健所を対象にアンケート調査を行う。そして1歳6か月児歯科健診の実施状況やその他の乳幼児歯科健診・相談の実施状況と、健診後の事後措置や3歳児歯科健診への連動性の有無について実態を把握する。次に健診を実際に担当している歯科医師、歯科衛生士を対象に、小

児の年齢や発達時期に応じて、どのような診査項目、指導内容が必要と考えているかを調査する。同時に、最近市町村または保健所の歯科健診を受診した小児の保護者から、健診のシステムや内容に関する評価、意見などを調査し、受診者側からのニーズを探ることとする。

行う。調査方法はアンケートによるものばかりでなく、受診者のニーズや意識の多様化に応じたりサーチ手法も併用する。

〔調査内容〕 歯科健診を受けた結果の評価（健診の流れ、内容、指導などについて）、および今後望まれる歯科健診のあり方について。

3年間の研究の概要

1. 各地域の乳幼児歯科健診の実態把握

〔調査方法〕 市町村および保健所に対してアンケート調査を行う。

〔調査内容〕 1歳6か月児歯科健診の実施状況と乳幼児歯科相談の実施状況について、また健診後の事後措置（フォローアップ）の状況や3歳児歯科健診への連携の状況について。

2. 歯科サイドからの診査項目や指導内容に対する評価

〔調査方法〕 歯科健診を実際に担当している保健所勤務の歯科医師、歯科衛生士および地域歯科医師会に対してアンケート調査を行う。

〔調査内容〕 現在実施している各歯科健診における診査項目と指導内容、および小児の年齢・時期に応じてどのような診査項目、指導内容が必要と考えられるかについて。

3. 受診者サイドからの歯科健診のシステム、内容などに対する評価、要望

〔調査方法〕 市町村あるいは保健所の乳幼児歯科健診を最近受診した保護者を対象に調査を



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



乳児期から幼児期前半にかけては、乳歯の萌出開始から乳歯列咬合の完成までと口腔の形態的变化が著しく、同時に、咀嚼や言語などの口腔に関連した機能発達も顕著な時期である。そこで、乳幼児期の小児のう蝕をはじめとした歯科疾患を予防し、口腔の健康を維持していくことは、口腔の形態的発育や機能的発達の面からも重要である。またこの時期は、食生活をはじめとした小児の生活習慣が形成されていく時期でもあり、小児の保育環境や親の養育態度などにより小児の生活習慣の個人差も大きい時期である。特に、核家族化、少子化、生活の多様化に伴う小児の生活環境の変化は、食事や口腔習癖など口腔に関連した問題と結びつくことも多く、これらの問題がう蝕や不正咬合などの歯科的問題の原因となる場合も少なくない。また、価値観も多様化している現状では、従来行われてきた画一的な指導では、生活習慣の改善も難しい状況にあると考えられる。

そこで本研究では、まず各地域における乳幼児歯科健診の実態を把握し、さらに小児の年齢、発達時期に応じて、どのような診査内容や指導・相談の場などが必要と考えられているかを、歯科サイドと受診者サイドの双方を対象に調査することとした。